

竹内好訳

魯迅文集

第二卷

筑摩書房

魯迅文集第二卷

一九七六年十二月一日初版第一刷発行

訳者 竹内 好

発行者 井上達三

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二―八郵便番号一〇一―一九一
電話〇三―二九一―七六五一振替口座東京六一四一二二三

印刷・精興社 製本・牧製本

1397-78002-4604

魯迅文集第二卷
目次

野草

題辭

秋夜

影の告別

乞食

わが失恋

復讐

復讐(その二)

希望

雪

風

美しい物語

行人

3

5

8

10

12

15

17

20

23

25

29

32

死 火

犬の反駁

失われたよい地獄

墓碑銘

崩れた線の震え

意見発表

死 後

このような戦士

賢人と愚者と奴隷

押し葉

色あせた血痕の中に

まどろみ

41

44

46

49

51

55

57

63

65

69

71

73

朝花夕拾

小引

犬・猫・鼠

阿長と『山海經』

二十四孝図

五猖会

無常

百草園から三味書屋へ

父の病気

こまごました事

藤野先生

范愛農

後記

故事新編

序言

天を補修する話

月にとび去る話

洪水をおさめる話

わらびを採る話

剣を鍛える話

関所を出てゆく話

戦争をやめさせる話

死人をよみがえらす話

訳註

資料「呐喊の評論」

解説

成仿吾

竹内好

398 391 339 323 307 293 266 241 219 203 190 187

野草

題 辭

沈黙しているとき私は充実を覚える。口を開こうとするとたちまち空虚を感じる。

過ぎ去った生命はもう死滅した。私はこの死滅を喜ぶ。それによって、かつてそれが生存したことがわかるから。死滅した生命はもう腐朽した。私はこの腐朽を喜ぶ。それによって、今なおそれが空虚でないことがわかるから。

生命の泥は地に棄てられ、喬木を生まず、ただ野草を生む。これ、わが罪だ。

野草は、その根深からず、花と葉美しからず、しかも露を吸い、水を吸い、死んで久しい人間の血と肉を吸い、おのがじし自分の生存を奪いとる。その生存も、踏みにじられ、刈り荒らされ、ついに死滅して腐朽するまでだ。

だが私は、心うれえず、心たのしい。高らかに笑い、歌をうたおう。

私は私の野草を愛する。だが野草を裝飾とする地を憎む。

地火は地中を運行し、奔騰する。熔岩ひとたび噴出すれば、一切の野草と、および喬木とを焼

きつくす。こうして腐朽するものさえなくなる。

だが私は、心うれえず、心たのしい。高らかに笑い、歌をうたおう。

天地がかくも静謐では、私は高らかに笑い、歌をうたうことができない。天地がかくも静謐でなくても、私はそれができぬかもしれない。私はこの野草のひと束を、明と暗、生と死、過去と未来の境において、友と仇、人と獣、愛者と不愛者の前にささげて証とする。

私自身のために、友と仇、人と獣、愛者と不愛者のために、私はこの野草の死滅と腐朽の速かならんことを願う。そうでなければ、私はそもそも生存しなかったことになる。それでは実際、死滅と腐朽よりも不幸だ。

去れ、野草よ、わが題辞とともに！

一九二七年四月二十六日、

広州の白雲楼⁽¹⁾にて、魯迅しるす。

秋夜

わが家の裏庭から塀越しに二本の木が見える。一本は棗なつめ、もう一本も棗である。

その真上に当る夜の空は異様で、しかも高い。こんな異様でしかも高い空を私は一度も見たことがない。まるでこの世から遠く、人が仰いでも見えぬ遠くへ行きたがっているようだ。だが今のところ、色あくまで青く、数十個の星の眼を、冷い星の眼を、きらきら瞬いている。そして口もとにいかにも意味ありげな微笑をうかべて、深い霜をわが庭の野生の草花に降りそそぐ。

それらの草花が、ほんとは名を何というか、人がそれを何とよぶか私は知らない。私の覚えてゐるのは、そのひとつが、ごく小さなピンクの花を咲かせたことだ。今も咲いているが、形はもと小さい。冷い夜気のなかでかの女は、身をすくめて夢をみる。春の来るのを夢み、秋の来るのを夢みる。痩せた詩人がかの女の最後の花びらに涙をこすりつけて、たとい秋が来ようと冬が来ようと、そのあとにかならず春が来、蝶はみだれ飛び、蜂は春の歌をうたうと自分に告げた夢をみる。そこでかの女はほほえむ。色は凍こえて痛ましく赤らみ、身をすくめたままながら。

棗の木はほとんど全部の葉を落とした。このあいだまでは取りこぼしの実が目あてで、たまたま子どもが二、三人で打ちおとしに來たが、今はもう実がひとつも残らぬばかりか、葉も落ちつくした。かれは秋のあとに春が来る小さなピンクの花の夢を知っている。春のあとはやはり秋になる落葉の夢も知っている。ほとんど葉が落ちつくして幹だけになったかれは、実と葉が鈴成りだったころの弧形を脱して、のうのうと背伸びしている。しかしいくつかの枝は、棗打ちの竿で傷つけられた肌をいたわるように、まだ首を垂れている。まっすぐ伸びたいちばん長い二、三の枝だけは、黙々と鉄のように、異様で高い空を突きさし、そのため空はあわてて瞬く。空のまん丸い月を突きさし、追いつめられた月は青ざめる。

瞬いている空は、ますます青くなり、ますます不安になり、はやく棗の木を避け、この世から逃げ出したがっているらしい。月だけをあとに残して。だが月もこっそり東に隠れてしまう。しかも何ひとつない裸の幹は、相変らず黙々と鉄のように、異様で高い空を突きさす。どんなに蠱惑的に目を瞬こうと、それにめげずに、あくまでその死命を制するかのよう。

ギャアとひと声、無気味な夜行鳥が飛び去る。

不意に私の耳に深夜の笑い声がひびく。クックッとはかり、睡っている人に遠慮した忍び笑いだが、あたりの空気は一齐に唱和して笑い出す。この深夜、ほかに人はいない。その声が自分の口から出たとすぐわかり、その笑い声に追われてすぐ自分の部屋にもどる。ランプの芯はすぐ私の手でかき立てられる。

うしろの窓ガラスにトントン音がして、無数の小さな虫がぶつかる。まもなく何匹かが、紙の破れからだろう、なかにとび込む。とび込むと今度はガラスの火屋ほやにトントン音たててぶつかる。一匹は火屋の上からはいり込んで火にぶつかる。これは本物の火だぞ、と私が思う。あと二、三匹は、ランプの紙の笠にとまって息せいでいる。ゆうべ貼りかえたばかりの笠で、文様のあるまっ白い紙の片隅には緋色の梔子くちなしさえ描かれている。

緋色の梔子が花咲くとき、棗の木はまたも小さなピンクの花の夢をゆめみ、こんもりとまっ青な弧形を描くだろう……私はまたも深夜の笑い声を耳にする。いそいで雑念を断ちきり、白い紙にとまったままの小さな青い虫を眺める。頭が大きく、尾が小さく、形は向日葵ひまわりの種に似て、小麦の半分の大きさしかない。からだ一面さ緑の色が愛らしく、いじらしい。

私はあくびをし、たばこに火をつける。煙をはきながら、黙々とランプに相對して、さ緑の精緻なこれら英雄たちを敬弔する。

一九二四年九月十五日

影の告別

人が睡りにおちて時さえ知らぬとき、影が別れに来て告げることばは――

おれのきらいなものが天国にあれば、行くのがいやだ。おれのきらいなものが地獄にあれば、行くのがいやだ。おれのきらいなものが君たちの未来の黄金世界にあれば、行くのがいやだ。

だが、君こそおれのきらいなものだ。

友よ、おれは君について行くのがいやだ。とどまることが。

おれはいやだ。

ああ、ああ、おれはいやだ。無にさまようほうがよい。

おれはただの影だ。君に別れて暗黒に沈もう。だが暗黒がおれをのみ込むかもしれない、光明がおれを消し去るかもしれない。

だがおれは明暗の境をさまようのがいやだ。暗黒に沈むほうがよい。

だが結局は、明暗の境をさまようことになる。黄昏であるか黎明であるかを知らぬままに。おれはかりそめに灰色の手をあげて一杯の酒を飲み干すまねをし、時さえ知らぬとき、ただひとり遠く行こう。

ああ、ああ、もし黄昏ならばむろん黑夜がおれを沈めるだろう。でなければ白日がおれを消すだろう、もし今が黎明ならば。

友よ、時は近い。

おれは無にさまようべく暗黒に向かおう。

君はなおも贈物をせがむか。捧げるべき何をおれが持とう。ぜひにとあればやはり暗黒と空虚だ。ただ願わくは、暗黒があるいは君の白日によって消されることを。ただ願わくは、空虚が断じて君の心を満たさぬことを。

おれはこうありたいのだ、友よ——

おれはただひとり遠く行く。君ばかりでなく、ほかの影さえいない暗黒へ。おれひとりが暗黒に沈められ、かくて世界は完全におれ自身のものだ。

一九二四年九月二十四日